年報　タイ研究　No.15, 2015　1－20.

【研究ノート】 1

タイ人の怒り対処方略と価値観
――バンコクの高等教育機関における面接調査結果をもとに――

Anger Coping Strategies and Values of the Thais: Interview at the Higher Education Institutions in Bangkok

堀　本　美都子*
HORIMOTO Mitsuko

In order to build hypotheses on display rules and a coping strategy model of Thais' anger, this study investigated socio-cultural factors related to anger by interviewing twenty Thais (12 men and 8 women aged 26–61 years). Using the semi-structured approach, the interviewees were asked to talk about their anger experiences in the daily life. The transcribed speech data were analyzed on the basis of the grounded theory approach. It was found that "Not expressed" and "Discussed calmly" were often used in coping with anger, suggesting that Thais have a belief that angry feeling should be suppressed to maintain interpersonal relationships. Furthermore, it is suggested that while Thais expect to change the behavior of the others by expressing their anger feelings, they also think that it is impossible to force a change in behavior of the others. It is discussed that the anger coping strategies of the Thais are based on *Cai-yen* and *Kreng-jai* values in the Thais' value system.

1．研究の背景と目的

日タイ関係が政治、経済、文化等のあらゆる面で重視されるなかで日本人がタイ人と接触する機会が増えている。日本人がタイ人と友好な関係を維持し、よりよいコミュニケーションを行うためにも、タイ人の文化と価値観に関する研究は不可欠である。異文化理解のアプローチとして、言語をはじめ非言語や価値観等、さまざまな側面からのアプローチが可能であるが、本研究は社会構築説の立場からタイ人の怒りの対処方略を心理学的に検討する。

対人コミュニケーションにおいて怒りはおそらく最も危険な感情である［Ekman and Friesen 2003: 78］。その表出は社会化を通じて学習され、社会環境によって大きく変化すると言う［Potegal and Stemmler 2010: 4］。社会構築説に立って怒りを研究するということは、怒りを生得的な感情とみなさずに、それを文化的な価値観に根ざした社会的規範によって変容する感情として扱うことを意味する。

感情心理学においては、これまで、感情が生得的で普遍的なものであるという立場から研究がなれている一方、感情を社会文化的に構築されたものであるとみなす感情の社会構築論の立場からも研究がなされている［コーネリアス 1998］。後者

*神戸大学国際文化学研究科博士後期課程

を代表する研究者であるAveril［1980］は、感情は個人とその文化の両方の構築物であると定義づけている［cf.コーネリアス 1998: 199］。つまり、人間は文化が異なっても、同じような場面で喜びや怒りや悲しみを感じ、その感情を表す表情も文化普遍性があるが、社会構築論では、ある特定の感情をいつ、どこで、どのように、誰に対して表出するか、あるいは表出すべきでないと判断するかは、その文化の社会的規範によって決定されている［Porter and Samovar 1998: 454］とされる。感情が社会構築されるのであれば、感情の表出方法には文化的規範や価値観が反映されると考えられる。これまで、感情の社会構築論の立場からアメリカ人の怒り［Averil 1982］や日本人の怒りについての研究［大渕・小倉 1984、木野 2000］が行われているが、タイ人の怒りについて検討したものはまだない。

本研究は、タイ人の行動規範や価値観に関する先行研究［Suntaree 1990、ホームズ・スチャーダー 2000］を参照しながら、タイ人の怒りの対処方略と価値観に関する仮説構築の足掛かりとして、バンコクの高等教育機関に在籍する社会人学生及び職員の怒りの対処方法、すなわち、怒りを感じた場合に、どのように怒りを表出するか、あるいはどのように怒りを制御するか、それはなぜかについて調べ、タイ人の怒り対処方略と価値観との関係を検討しモデル化しようとするものである。具体的には次の３つを問題にする。

・タイ人は怒りを感じたとき、どのような対処方法をとるか。
・タイ人の怒りの対処方法は、状況によってどのように変化するか。
・タイ人の怒りの対処方法は、タイ人の価値観とどのように結びついているか。

２．先行研究

(1) 怒りの対処方法

先述した感情の社会構築論の立場から怒りの社会的機能に関する研究がなされている。Averil［1982］は、怒りが特定の社会的、個人的目標を達成するために起こす意味ある行為であると主張し、怒り経験を構成する各水準での反応を測定する「エピソード法」と呼ばれる調査法を考案し、米国の社会人や学生を対象に、日常生活における怒りの誘因、表出方法、他者の怒り表出に対する反応等を調査した。その結果、怒りの表出には直接的攻撃、間接的攻撃、非攻撃的反応など、様々な種類があることを見出した。また、怒りには相手の間違いを正したり人間関係を調節したりする社会的機能があると論じている。

大渕・小倉［1984］はAveril［1982］が考案した質問紙を邦訳し、日本の社会人や学生を対象に日常生活における怒りの誘因、表出方法等について同様の方法で調べた。その結果、日本人の怒りの表出方法として、非攻撃的反応が最も実行率が高かった。非攻撃的反応には、「心を鎮める」「第三者と相談する」「相手との話し合い」「怒りと反対の表現」があるが、実行率が最も高いのは「心を鎮める」、次が「第三者と相談」であった。「相手との話し合い」は、6割の被験者が実行を願望しているにも関わらず、実際には3割しか実行していなかった。このことについて大渕らは、「相手との話し合い」は状況の変化を直接的に目指すかなり積極的な行動だが、被験者にはしばしば実行が困難に感じられたようだと考察している。

木野［2000］は日本人大学生を対象に怒りの表出方法とその対人的影響について研究を行った。怒りの誘因となる場面を提示し、その場面において どのように怒りを表出・表現するか回答させた。その結果、日本人の怒り表出方法としてもっともよく使用されるのは、「いつも通り」「遠回し」「表情・口調」という、抑制的で言葉では怒りを明示しない表出・表現方法であることを確認し、その理由について木野は、日本の社会では和が強調され、あえて自己主張しなくても相手は真意を理解してくれるであろうという期待を前提とする察しのよい関係が要求されているからではないかと論じている。

(2) タイ人の価値観と怒りの表出

タイ人の怒りの表出に関する実証的な研究はまだ行われていない。そこで、本研究ではタイ人の価値観や行動規範に関する先行研究を踏まえて既存の理論的枠組みを参照しながら、タイ人の怒りの対処方略のモデル化を行うことにした。

タイ人の社会的行動についての研究は西洋の文化人類学者によって始められた。Embree［1950］は、タイ人の社会構造は、日本、中国、ベトナムとは対照的に、社会における個人行動の多様性が容認された「ゆるい構造」をもつ社会であると論じた。その後、コーネル大学のSharpら［1953］によりバーンチャン村の研究プロジェクトが本格的に行われ、Embreeの提唱したタイ社会の「ゆるい構造」説が裏付けられた。それ以降、それがタイ人の社会行動を説明する上での主流の解釈となった。その後、Phillips［1965］は「ゆるい構造」説を発展させ、利己的で自由を求める「個人主義」的な人格がタイ人の特徴であるとした［cf. Suntaree 1990: 2-7］。

以上の西洋人研究者によるタイ人研究は個人的観察に基づくものであり、実証的であるとは言えないと考えたタイ人社会心理学者Suntaree［1990］は、タイ人の価値観に関する大規模な調査研究を行っている。その調査では、Rokeach［1973］の価値概説に基づいて「最終価値」20項目と「手段価値」23項目からなるタイ人の価値尺度を作成し、2469名（15~70歳）を対象に質問紙調査を行った。調査対象者はタイ全国の農業従事者、商業従事者、学生、公務員など、様々な職業及び階層のタイ人を含んでいた。調査では「最終価値」20項目と「手段価値」23項目を提示し、重要度が高いと思われる順に並べ替えさせた。その結果、タイ人の国民性を表すと考えられる9つの価値群が抽出され、その中で特に重要な上位3つの価値観はエゴ志向、報恩的関係志向、円滑な人間関係志向であった。

Suntaree［1990: 159］はその結果を踏まえ、タイ人の特徴について次のように述べている。タイ人は何よりもエゴ志向であり、エゴ[1)]の最高の価値である「独立した自己（Independent-being oneself: Pen tua khong tua eng）」や、非常に高い自尊心（Self Esteem）等がタイ人の特徴である。つまり、タイ人のエゴは独立、自尊心、尊厳を意味し、Hofstede［1984］のいうような西洋的個人主義とは別物である。また、タイ人はエゴが非常に強いため、不必要な衝突を避けてお互いのエゴを守るための「回避メカニズム」が必然的に生まれ、その「回避メカニズム」を担保するのが「円滑な人間関係志向」に他ならない。タイ人は社会的場面においてネガティブな感情の表出を抑制し、円滑で楽しく礼儀正しい相互作用によって他人のエゴ

を傷つけないよう配慮している。

ホームズとスチャーダー［2000: 79-104］は、西洋人と異なるタイ人の文化的行動様式について、相互依存にもとづく強固なヨコの人間関係の維持と社会的身分格差を受け入れ忠誠と見返りを望むタテの関係がタイの社会の土台をなすと論じている。また、タイの社会を家族の世界、気配りの世界、自分本位の世界の３つに区分し、特に気配りの世界では様々なタイ的価値観が重視されると説明している。彼らはこのタイ的価値観の一つとして自己抑制（サムルワム）を挙げている。自己抑制とは、タイ人が仏教文化に大きく影響された家庭環境の中で、自分を抑えて平静さを保ち、怒りを始めとする様々な感情を露骨に外に表すことを避けるように教えられることによって身につける価値観であるという。

３．研究方法

タイ人の怒りの対処方略のモデル化にあたっては質的研究を行った。質的研究法は、特定の観察によって得られたデータに存在するパターンを発見し理論化する帰納的推論に適した研究方法である［Baxter and Babbie 2004］。面接調査によって得られた発話データを録音し、その発話データをタイ語テキストにしたものを質的分析方法によって分析した。

(1) 対象者

バンコク在住のタイ人20名（男性12名、女性8名）が対象者となった。バンコクにある2つの大学において、勤務経験が2年以上あるタイ人を条件とし、社会人学生や職員を対象に研究協力者を募集した。対象とした大学の一つは、社会人を対象とした修士課程がある。在籍する学生は年齢、職業に多様性があり、より多様な怒りの経験に関するデータが収集できるため、本大学での実施を決めた。また、一カ所だけでは目標とする協力者の数が集まらなかったため、面接者が在籍するもう一つの大学の職員にも協力を依頼した。対象者の年齢は26歳から61歳で、平均年齢は36.3歳（SD＝6.0）であった。

但し、タイは階層社会であり、バンコクと地方、学歴や職業などによって人々の価値観に多様性があると考えられるが、本研究の対象者はバンコクの大学関係者のみであり、タイ人全体を指すものではない。

(2) 面接方法

面接は2013年６月から７月にかけて実施した。面接場所は対象者が所属する大学の構内であった。面接はタイ人の面接者によってタイ語で実施した。面接は１対１の対面式で行い、所要時間は１人約30分とした。

面接を始める前に、対象者に研究目的を記載した同意書を提示し、研究の目的・意義、面接方法、記録内容の取扱いについて説明を行い、同意を得た上で面接を行った。

面接は半構造化手法によって行った。半構造化面接とは、あらかじめ面接でふれる必要のある質問についての指針が用意されている場合など、面接者にある程度の質問内容決定の裁量が認められている手法である［渡辺・山内 2002］。

面接者には、あらかじめ研究の目的、面接の方法、面接の手順、質問例と質問の要点について説明を行い、①怒りに対する本人の意識を自由に話

してほしい、②面接の対象者がリラックスして話せるような雰囲気で質問する、③質問の内容や言い回しは面接者の判断で変更してもよいと説明した。質問例は、「あなたは怒りやすいタイプですか。」「どういう原因で怒ることがありますか。」「どういう場面で怒ることがありますか。」「最近どういう場面で怒りましたか。（状況、原因、対人関係、怒り方など詳しく）」「なぜそういう対応をしたのですか。」「相手や原因が変わったら同じように怒りますか。」「怒ってないのに怒った顔をしたり怒っているのに表出しなかったりすることがありますか。あるとすればどのような場合ですか。」などである。

質問の要点は「怒りを感じた相手との関係による怒りの対処方法の違い。（両親、上司、親友、同僚、店の従業員、知らない人、外国人など）」、「怒りの誘因による怒りの違い。（行動の妨害、侮辱、期待や希望の侵害、非道徳的行為、所有物の侵害、相手による暴力など）」「怒り対処方法の種類。（表情・口調、遠回し、嫌味・皮肉、冷静に注意する、感情的に非難する、無視、無表出など）」とした。怒りの定義については、「マイポーチャイ（不満）」、「チュン（むっとする）」など、強度の低い怒りから激しい怒りまですべて怒りに含めてよいと説明した。

面接に先立ち、2名のタイ人女性を対象に実際の面接と同様の手順で予備面接を行い、面接手順や質問内容が適切かどうかの確認を行った。その結果、①面接対象者が日常生活で怒りを経験したことがなく、面接が予定通り進まない場合には、対象者が怒りを感じるような状況の例を与えて質問する、②相手から怒りを表出された場合について質問するなど、質問内容を改善した。実際の面接では、公共の場で怒りを感じやすい状況として、「買い物に行って会計の列に並んでいるとき誰かに割り込まれた」、「運転中に急に割り込まれた」、「外国人、あるいはタイ人がお寺で仏像と肩を組んで写真をとっていた」というような状況を面接者が口頭で例示して、どう感じるか、どのような行動をとるかを回答させた場合もある。

(3) データの分析方法

面接はすべてタイ語で行われ、面接中の発話をICレコーダーで録音した。面接終了後、タイ人の協力者に依頼し、録音した発話内容をタイ語でテキスト化した。その後、筆者自身がすべてのタイ語テキストを日本語に訳し、発話内容を十分に理解した上で、筆者がタイ語のテキストを直接分析した。

データの分析は、冴木［2008］とシャーマズ［2008］を参照しながら、グラウンデッド・セオリー・アプローチに準じた質的分析手法により分析した。

分析手順については、面接では一人の対象者に様々な状況における複数の怒りの場面を質問したため、シャーマズ［2008: 62］の出来事ごとのコード化を参照しながら、テキストデータの中から怒りを経験した場面を抽出しコーディングした。次に、冴木［2008: 35-100］を参照しながらオープン・コーディングを行った。オープン・コーディングでは各場面の発話内容を切片化し、切片化したデータにラベルを付した。この時点ではラベルは抽象化せず、データの意味や内容に則したものとした。冴木［2008］によればグラウンデッド・セオリー・アプローチは各切片データのプロパティとディメンションを抽出するプロセスを伴

うが、本研究ではこのプロセスを省略した。次に、その場面の類似した複数のラベルをまとめてカテゴリー化し、筆者が日本語でカテゴリー名をつけた。その後、怒りを感じた状況のプロセスを示すために各カテゴリーを状況、行為/相互行為、帰結の3つに分類した。

上記の分析手順を１名の対象者のすべての場面について行った後、各場面のカテゴリーを比較して類似するものを統合し、上位カテゴリーとして名前をつけた。この作業によりカテゴリーとサブカテゴリーを作りあげた。

次に、別の対象者１名を選び、そのデータを同様の手続きで分析し、また別の１名について分析するという形式で最終的に20名分のデータを分析した。最後に、すべての対象者のカテゴリーを統合した。その結果、「怒りの対処方法」、「怒りを感じた相手の立場」、「対処方法選択の理由」、「怒りを感じた相手との人間関係」、「対処後の帰結」、「対処方法に対する評価」の６つのカテゴリーに統合された。

「怒りの対処方法」は、怒りの表出強度を目安に分類したところ、「無表出」、「表情・口調」、「嫌味」、「冷静に話す[2)]」、「文句を言う」、「注意する」、「叱る」、「感情的に話す」、「暴力」の９つのサブカテゴリーに分類された。さらに、それらを表出強度により「無」、「弱」、「中」、「強」の４段階に分類した。

「怒りを感じた相手の立場」のサブカテゴリーは、「目上」、「同等」、「目下」、「知らない人」の４つになった。最後に、「怒りを感じた相手の立場」と「怒りの対処方法」のサブカテゴリーを整理し、相手の立場によってどのような対処方法をとることが多いかを分析した。

４．結果と考察

(1) 怒りの対処方法

データの分析では、対象者の発話データの中から、怒りを経験した場面を抽出し、怒りを感じた場合の対処方法を数量的にまとめ、全体的な傾向を分析した。20名の対象者の発話データを整理したところ、115の怒り経験場面があった。怒りの対処方法は、表出強度の弱い順に、「無表出」、「表情・口調」、「嫌味」、「冷静に話す」、「文句を言う」、「注意する」、「叱る」、「感情的に話す」、「暴力」の９つのサブカテゴリーに分類された。９つの対処方法を以下に説明する。

・無表出

怒りを感じていても、人間関係の悪化、相手との対立やもめごと、期待する利益が得られなくなることを恐れ、黙って何も言わない。表情は無表情になる場合が多いが、場合によっては笑顔すら浮かべ、相手に自分の怒りを悟られないようにする。しかし、普段からよく話をし、笑顔を絶やさない人柄であれば、無表情でいることで何かいつもと様子が違うと気づくだろう。相手の前で怒りを表すことがなくても、しばらく相手との距離をおいて話をしない、無視する、第三者に話してうっぷん晴らしをするなどの二次的な行動が伴う。相手に対して怒りを表出しないことで怒りの誘因が解決することはないので、自分一人で状況に対応する、あるいは不満を感じながら相手の言う通りにする。怒りの感情そのものを抑制するために物事をプラスに考えるといった回答は少なかった。

・非言語・嫌味

相手に怒っていることを伝えたいが、問題を起こしたくないといった場合に、まなざしで相手を非難する、わざと本人に聞こえるように第三者に話す、ぶっきらぼうな口調で話す、嫌味やあてこすりを言うなどの回答があった。

・冷静に話す

怒りの誘因となった出来事について、相手からの説明を求めたり、理論的に自分の考えを説明したりする。感情は抑制しているが、相手になぜそうしたのか理由を聞くことによって、自分が相手の言動に不満を感じていることが伝わると考えている。冷静に話し合うことで、怒りの感情を適切なレベルで相手に表出し、お互いの正当性を確認し、怒りの誘因となった状況が改善されると考えている。

・注意する

相手がしている行動を制し、正しいと思われる行動をとるように促す。買い物の際に会計の列に横入りされた時は、列があることを示し、やや間接的に列に並ぶように促す。運転中であれば、クラクションを鳴らす。お寺での不適切な行為を見た場合、外国人の場合であれば、仏教の文化について説明をし、不適切だということを理解してもらうが、タイ人の場合であれば、ただやめるように言う。

・文句を言う

「冷静に話す」や「注意する」とは違い、自分が不満であることのみを相手に伝達する場合である。ただ怒っているということを直接相手に伝えたり、独り言を言ったり、第三者に文句を言ってきかせるが、問題を解決したり、相手の行動をやめさせることができない、あるいは行動をやめさせるという意思はない場合が多い。口調は、少し感情的であるが、相手を怒鳴ったり罵ったりするほどではない。

・叱る

相手の行動が期待通りでない場合に、大きな声を出したり相手の顔を指さしたりしながら、その行動を止めるように言う。大きな声を出すことで、自分の言うことを聞くようにする。相手が子供や学生などで、自分が指導的な立場にある場合に叱るという方法をとる場合が多い。

・感情的に話す

大きな声を出して感情的に相手を怒鳴ったり罵ったりする。相手も感情的になって言い返し激しい口論となる。また、サッカーの競技中には、普段よりもきつい口調で相手に警告をする場合がある。いずれの場合でも、本来は感情的な表出はすべきでないと考えているが、怒りの感情の高まりが抑制できない場合や、外資系企業の職場などタイの社会文化が適用されない状況や、当事者の性格などによってこうした対処方法をとる場合もある。

・暴力

暴れて物を投げつける、殴る。小さな子どもが何か悪いことをした場合に、まだ話して聞かせても理解できないので体罰として殴る。また、買い物先で金銭トラブルがあった場合に、自分が店の主人に騙されたことを周囲の買い物客にアピール

するために暴れて物を投げつける。

最も多いのは「無表出」と「冷静に話す」でありそれぞれ27場面である。次に多いのは「注意する」で24場面である。これら3つの対処方法は全場面の約3分の2を占めており、タイ人の怒りの対処方法の代表的なものであると考えられる。

各対処方法は、研究者が怒りの表出強度別に「無」~「強」の4段階に分類した。怒りの表出強度、相手の立場別対処方法と場面数は表の通りである。表に示すように、115場面の中では「無」~「中」の強度のものが多い。これは、タイ人が怒りの場面で怒りをあまり強く表出しないことを示唆していると考えられる。上記の考察結果を図式化したものを図の「怒りの対処方法」に示す。

(2) 怒りを感じた相手との人間関係

怒りを感じた相手の立場は、両親、兄弟、親戚、配偶者、恋人、職場の上司、先輩、同僚、後輩、部下、大学の同級生、顧客、タクシー運転手や店の店員などのサービス提供者、見知らぬ人などがあった。相手の国籍は、タイ人以外に日本人、ドイツ人、アメリカ人などもあった。

各場面で怒りを感じた相手の立場を目上（両親・上司・兄姉・先輩）、対等（配偶者・同僚・同級生）、目下（弟妹・部下・後輩）、知らない人（顧客・サービス提供者・見知らぬ人）の4つに分類し、相手の立場別に使用された対処方法をまとめた（表参照）。相手が目上の場合、「冷静に話す」が29場面中12場面と最も多く、次に多かったのが「無表出」で9場面であった。相手が「対等」の場合は、21場面中「無表出」が9場面であり最も多かった。目下については、総場面数が16場面と比較的少なかったが、「冷静に話す」と「叱る」がそれぞれ4場面ずつであり、最も多かった。相手が「知らない人」の場合は、49場面中「注意する」が22場面であり最も多かった。

最も多用されていた上位3つの対処方法について検討したところ、「無表出」は目下が対象の場合は1場面しかなく、目下以外のすべての立場で多用されていた。「冷静に話す」はすべての立場の人間関係で使用されていた。「注意する」は特

表　怒りの表出強度、相手の立場別対処方法と場面数

対処方法	怒りの表出強度	相手の立場				場面数	(%)
		目上	対等	目下	知らない人		
無表出	無	9	9	1	8	27	23.5%
非言語・嫌味	弱	3	0	1	4	8	7.0%
冷静に話す	中	12	3	4	8	27	23.5%
注意する	中	0	1	1	22	24	20.9%
文句を言う	中	3	2	2	3	10	8.7%
叱る	強	0	1	4	0	5	4.3%
感情的に話す	強	2	5	2	3	12	10.4%
暴力	強	0	0	1	1	2	1.7%
計		29	21	16	49	115	100.0%

出典）調査結果により筆者作成。

に相手が見知らぬ人の場合に多く用いられていた。相手の立場がどのような場合でも「冷静に話す」という対処方法が最も使用されやすいことが示唆される。目下の場合、「無表出」が１場面しかなく、「叱る」が多用されていることから、相手が目下の場合には目上の場合より怒りの表出強度が強くなると考えられる。

本研究で行った面接では勤務経験が２年以上ある社会人を対象者としたため、上下関係については両親、兄弟などの家庭内での状況と、上司・同僚・部下などの職場での状況での怒りの経験を話す者が多かったと考えられる。発話内容から、タイの家庭内では子どもの頃は両親に対して自分の意見を述べたり逆らったりすることは許されていないが、大人になるにつれて両親に対して自分の考えを冷静に述べることが許されるようになることが示唆された。

職場においては、特に業務に関することについては、上司と意見が対立して怒りを感じた場合でも冷静に話して問題を解決しようとする傾向がみられた。本研究の結果から、タイ人は職場における上下格差を容認する意識が強いものの、目上の場合であっても「無表出」より「冷静に話す」という対処方法をとる場面が多かったのは、目上の人に対して、自分の考え方や権利を相手に伝えようとする態度の現れからではないかと推察される[3)]。

しかし、家庭内の上下関係は職場の上下関係とは異なり、前者は血縁に裏付けられたものであり、その人間関係はゆるぎない。家庭内の人間関係は破壊されることはないという前提があるのに対し、職場での上下関係は絶対ではないとタイ人が考えている点は注意すべきであろう。バンコクのタイ人は、転職率の高さにも見られるように、家族以外の集団への帰属意識が低いのではないかと考えられる。職場での上下関係は、むしろ利害関係を基本としており、上司との人間関係の悪化は個人的な利益の喪失につながる可能性があるため、ことさらに人間関係の維持が重視されるとともに、利益の喪失を防ぐために自己の権利の主張がなされるのではないかと考察される。タイ人の人間関係を論ずる際には、同じ上下関係であっても、家庭内の人間関係か職場など家庭外の人間関係かによって、区別をして検討する必要があるだろう。

「注意する」という対処方法は、「知らない人」に対して怒りを感じた場合に最も多く使用されていたが、相手が知人である場合には、ほとんど使用されていない。「冷静に話す」は、自分の意思を伝えつつも、相手の意思を聞こうとする対処方法であるのに対し、「注意する」は、相手の意思を聞かずに自分の意思を一方的に伝える対処方法である。知らない人との関係は、公共の場で出会ったその場限りの関係であり、人間関係の維持について配慮する必要がないため、無意識に相手の意思を尊重する必要はないと判断しているのかもしれない。

ホームズ・スチャーダー［2000: 83-84］は、タイ人には「家族の世界」、「気配りの世界」、「自分本位の世界」の３つ社会的世界があるとし、職場などオフィシャルに付き合う人々からなる「気配りの世界」では、相互に適切なマナーに基づく行動様式が期待されるが、公共の場である「自分本位の世界」では、お互いに見知らぬ者通しであり、気配りをもった対応は期待できないと述べている。本研究の結果から、外集団である「知らない

人」に対して「注意する」という対処方法が最も多用されていたのに対し、内集団である既知の人に対しては「注意する」がほとんど使用されず「無表出」や「冷静に話す」といった対処方法が多用されることが示唆されたが、ここからタイ人が「自分本位の世界」で怒りを表出する際、相手に対する気配りをしていないことがうかがえる。

(3) 怒り表出における前提と目的

怒りを表出した場面を分析した結果、相手がどのような立場であれ、タイ人は「無表出」や「冷静に話す」など、表出強度の低い対処方法を多用する傾向があることが示唆された。なぜ表出強度の低い対処方法が多用されるのかについて検討するため、「対処方法に対する評価」のカテゴリーを中心に分析した。

その結果、「黙っているのが一番よい」、「タイ社会では感情表出を弱くしなければならない」、「怒りを出しすぎることは相手に失礼にあたる」など、怒りの表出を抑制することがタイの社会的規範と考えられていることが見出された。以下は30代女性の発話の一部である。自分はストレートな性格であるといいながら、そのことを肯定的にはとらえていない。怒りを表出しすぎることは、礼儀に背くことであり、怒りの表出には適切なレベルがあるという、怒り表出に対する暗黙の前提が示されている。

คือเป็นคนที่ตรงไปตรงมามาก มันอาจจะเป็นส่วนหนึ่งที่ทำให้เราก็แสดงความโกรธโดยที่ไม่รู้สึกว่ามันผิด เรารู้สึกว่าทางนั้น เค้าต้องรู้ว่าสิ่งที่เค้าทำมันไม่ถูกต้องคือแต่มันต้องอยู่ในระดับที่มันโอเคนะคะ ถ้ามันโกรธมากเกินไป เราจะดูกร้าวร้าว ดูไม่สุภาพ คือเรารู้สึกว่าการแสดงความโกรธมันทำได้ แต่ต้องทำอยู่ในระดับที่เค้าเรียกว่าอะไรอ่ะค่ะ ... ที่ที่มันยอมรับได้อ่ะค่ะ

(訳) 私はとてもストレートな性格なんです。だから怒りを表出することが間違っているとは思わないで表出してしまうかもしれません。だってそう感じるんだもの。相手に自分が間違ったことをしたということを知らせるべきです。でも適切なレベルというものがあります。もし怒り過ぎたら、攻撃的に見えてしまいます。礼儀正しく見えません。怒りは表出してもいいけど、その程度はいわゆる、何というか、受け入れられるレベルのものでなければならないのです。

西洋人がいる職場で働いた経験がある30代女性は、西洋人とタイ人の怒り表出の異文化について、西洋人はダイレクトに意見を主張したり、怒りを表出することができるが、タイ人には西洋的な態度は受け入れられないと話している。

คนไทยยังไม่เปิดใจกว้างนะ ถ้าพูดตรงๆ ไอคนที่บอกว่า พูดมาได้เลย เปิดใจยอมรับ แต่เอา เข้าจริงๆอ่ะ ไม่รับเลย รับได้แต่วันรุ่งขึ้นอ่ะ ทำเหมือนคนไม่รู้จักกัน แค่ถ้าเป็นต่างประเทศเนี่ย มันรู้อยู่แล้วอ่ะว่ามันพูดตรงได้

(訳) タイ人ははっきり言ってまだそんなにオープンじゃないんですよ。なんでも言っていいよ、聞くからって言う人たちだって、本当は受け入れてはくれない。翌日になると、まるで知らない人みたいな態度になるんです。でも外国人は、ダイレクトに言っても大丈夫だって分かってるから。

なぜ怒りを抑制しなければならないかについて、対処方法の選択理由と対処方法に対する評価

をさらに分析すると、「無表出」を選択した回答者は、相手との衝突を避けたい、目上の人に対しては何もできない、問題を起こしたくない、怒りを出してはいけない、相手から悪い印象をもたれたくないなどの理由により、相手に対して怒りを出さないという選択をしていたことがわかる。「冷静に話す」を選択した回答者は、相手に自分の権利を主張しなければならない、自分が不満であることを知らせたい、黙っていても気分がよくない、問題の理由を知り解決したいという理由から、感情を抑制しながらも、自分の不満を相手に伝え、理論的に話しあうことを選択していた。

「無表出」「冷静に話す」のどちらを選択した場合も、その理由について、親しい人や家族とは人間関係を維持しなければならない、今後も一緒に働かなければならない、感情的に怒りを表示すると人間関係が悪化するなど、多くの対象者が「人間関係を維持したいから」と回答している。「無表出」を選択した40代男性はその理由を次のように説明している。

ทำเป็นว่าไม่โกรธ คือหนึ่งให้มันจบ ก็คือไม่อยากเข้าซี้ และสองก็รักษาสัมพันธภาพ คือถ้าเราไปต่อเถียงกับเค้า เค้าก็จะไม่พอใจเรามากขึ้น ทำให้เค้ามองเราในแง่ลบมากขึ้น แล้วก็จะทำให้เค้าคิดว่า ยังไงอ่ะ...คือเค้าเห็นเราก็จะมองในแง่ลบตลอด แต่ถ้าเรานิ่งซะ แล้วก็เราไม่ยอมรับ แต่ก็คือเราเฉยๆ ก็จะทำให้เรื่องจบไป ดีกว่าเราจะไปกระตุ้นเค้าแล้วทำให้เค้าเกิดความจำอ่ะ

（訳）怒ってないふりをしたのは、一つは問題を終わらせたかった。うるさく言いたくなかったんです。二つ目は、人間関係の維持です。もし相手と言い争ったら、ますます相手は私に対して不満に思うでしょう。そしてずっと相手からネガティブに見られるでしょう。でももし黙っていたら、つまり、こっちも相手の言うことを聞き入れてはいないけど、黙って知らん顔してたら、問題も終わるでしょう。相手を刺激するようなことをして、相手の記憶に残るよりもいいです。

この男性は、問題を解決するために一時的に相手と対立することが、その後の人間関係に長期的な悪影響を与えていると考えている。また、良好な人間関係の維持は、対立の原因となった問題を解決するよりも、優先順位が高いと考えていることがうかがえる。

次にあげる60代男性は、目的を達成するためには、感情を出しすぎないことが必要だと話している。人間関係を維持するために、怒っていても何食わぬ顔をしているのである。

คิดว่าผมก็เป็นคนนึงที่ต้องการรักษาสัมพันธภาพกับคนอื่น ผมไม่ใช่ประเภทแบบว่าไม่แคร์ ฉันจะทำไรก็ได้ ผมมองเป้าหมายเป็นสำคัญ เพราะฉะนั้นเวลาจะแสดงออกอะไร ผมก็จะไม่แสดงออกจนเกินไป ถึงแม้บางครั้งจะโกรธ แต่เราก็เฉยๆ ค่อยๆให้เวลามันค่อยๆทำให้เราเย็นลง ก็ใช้วิธีการนี้มาตลอด จนรับราชการก็ทำอย่างนี้ สำหรับตัวเองก็คิดว่ามันน่าจะได้ผลเพราะว่าเราใช้กันมาตลอด

（訳）私も他人との人間関係を良くしようと思うタイプです。そういうのを気にしないで、何でも自分がしたいようにするようなタイプではありません。私は目的が重要だと思います。ですから何かを表出するとき、やりすぎることがないようにします。怒っていても、何食わぬ顔をしているときもあります。時間がたつと自分も落ち着いてきます。そう

いう方法をずっととってきました。公務についていたときもそうです。自分では、効果があるだろうと思っています。ずっとその方法を使っていますから。

いくら怒りの表出は抑制すべきであると考えていても、実際に怒りを感じた場合にどのような対処方法を選択するかについては、怒りの程度、本人の性格、状況などに加え、上下関係や親密度など、怒りを感じた相手との人間関係によって、様々に変化する。怒りが抑制できず、「叱る」「感情的に話す」「暴力」など、怒りの表出強度の高い対処方法を選択する場合もある。怒りの表出強度の高い対処方法をとった場合の発話を分析すると、部下や子供など、相手が自分より目下の場合には、相手が言うことをききやすい、問題解決につながったというポジティブな帰結になる場合もあるが、多くの場合、ケンカによってお互いに傷つき、その後人間関係が疎遠になった、生徒を叱ったことによって生徒から受け入れられなくなったなど、人間関係の悪化というネガティブな帰結になる。

もう一つの対処方法として、強い怒りを感じ抑制できないと感じた場合に、一旦その場をはなれ、気持ちを落ち着けるために「一時放棄」する場合も多くみられた。次は40代男性の発話例である。

ถาม เราแสดงออกกับภรรยายังไง เวลามีเรื่องโกรธเล็กๆ น้อยๆ

ตอบ เดินหนีไปเลย ไม่เถียง พอฟังแล้วมันขัดกันแล้วก็ไปดีกว่า พอเย็นทั้งคู่ค่อยมาคุย เพราะ ถ้าร้อนกันอยู่แล้วมาคุยมันจะยิ่งบาน เขาไม่หยุดไม่เป็นไรเราไปเอง

（訳）

Q: 奥さんに対して、何か少し怒ったりしたとき、どのように表現しますか?

A: 逃げ出してしまいます。何も言い合ったりしません。相手のいうことが自分の考えと食い違うと、一旦その場を去った方がいいと思います。二人とも気持ちが落ち着いたら、話し合います。お互いカッカしているときに話してもますます悪くなるだけです。相手が話すのをやめないなら、自分から放棄すればいいんです。

「一時放棄」した場合には、気持ちが落ちついた後、怒りを感じた相手と「冷静に話す」ことが多い。一時放棄した方がよいと考える理由は、感情を抑制できず、感情をそのまま表出した場合には、不用意な発言をするなど、相手を傷つけてしまうだけで、問題を解決することができないと考えているからである。

一時放棄する場面がよくあるということは、タイ人が表面的な冷静さとは裏腹に、抑制できないと感じるほどの強い怒りを感じる機会も多いということを意味するのかもしれない。しかし、タイの社会文化では、その強い怒りを表出することは許されない。抑制できずに表出した場合には、人間関係の悪化という社会的制裁が待ち受けているからである。

タイの社会においては、人間関係の維持という最優先の目的を達成するために、怒りの表出は可能な限り抑制されるべきとされ、表出強度の低い怒りの対処方法が多用されるのではないか。こうしたタイ人の信念や態度は、Suntaree［1990］の提唱するタイ人の9つの価値群のうち、円滑な人間関係志向（Smooth Interpersonal Relationship Orientation）の価値群を反映していると考えられる。彼女は、円滑

な社会相互作用に高い価値観をおく社会にとって、ネガティブ感情の表出抑制は、きわめて重大な課題であると述べている［Suntaree 1990: 176］。また、相互作用を円滑に進め、公然とした対立を避けるため、「物静かで、慎重＝*チャイイェン*」つまり、自分自身の気持ちを静めるのと同時に、ゆっくりと静かで慎重なステップをとることによって、静かに状況をコントロールする能力は、非常に重要である［Suntaree 1990: 175］。こうした価値観がタイ人の怒りの対処方略においても重視されていることを物語る。

上記の考察結果を図式化して図１の「怒り表出の前提」及び「怒り表出の目的」に示す。

(4) 怒りの対処方法と自己の意思の伝達

人間関係を維持するために、怒りを抑制すべきであると考えるのなら、「無表出」や「非言語・嫌味」が最も多用される対処方法であってもよいはずだが、本研究の面接調査の結果から、「冷静に話す」が「無表出」と同じくらい多用されることがわかった。「冷静に話す」がなぜ多用されるのかについて、その理由を検討した。

両者は怒りを感じた当人の意思伝達の可否という点で、異なる属性をもつため、怒りを抑制できた場合の自己の意思伝達の有無によって、怒りの対処方法を2つに分類した。怒りを抑制し、かつ意志の伝達がない対処方法は、「表出しない」、「嫌味」、「非言語のみ」とした。怒りを抑制し、かつ意志の伝達がある対処方法は、「冷静に話す」、「文句を言う」、「注意する」とした。

「冷静に話す」という対処方法をとった場合には、自己の意思の伝達が可能となる。以下の40代男性の発話から、怒りを抑制するべきであるとしながらも、自分の意見は主張すべきであるという考え方がうかがえる。

> ก็โอเคนะ ดีกว่าเราเงียบแล้วทำตามที่เขาบอกแล้วมันไม่ใช่ตัวเราเองก็ไม่สบายใจ ไม่มีความสุข บางทีมุมมองความคิดมันอาจจะต่างกันอยู่ เราพูดดีกว่าเงียบ เราพูดในสิ่งที่เราสงสัยให้เขาอธิบายกลับมา หรือถ้าอธิบายแล้วไม่ใช่เราก็แย้งเหตุผลไป
>
> （訳）大丈夫ですよ。黙って相手の言う通りにするよりいいです。そういうのは間違いですね。そういうんだと、自分の気分もよくないし、ハッピーじゃないですよね。考え方が違うことだってあるでしょう。黙っているよりも、話し合った方がいいです。自分が疑問に思うことを聞いて、相手に説明してもらうのです。説明してくれても、自分の考えと違うときには、理論的に反論します。

また、怒りが抑制できなかった場合には感情をそのまま表出することになる。その場合に自分の不満を相手に伝えることはできるが、建設的な問題解決にはならず、その後の人間関係も悪化する。こうした対処方法は、タイの社会では適切な態度とはみなされていない。ただし、怒りを抑制できなかった場合でも、一時放棄という方法をとることにより、感情をそのまま出すことにより受けるダメージを軽減することができる。怒りが収まるまでその場を放棄することで、人間関係維持への悪影響を軽減すると同時に、気持ちが収まってから再度話し合うことで、自己の主張と建設的な問題解決が可能となる。激しい怒りを抑えるためにその場から一時逃げ出すという態度は、タイ人の特徴的な怒りへの対処方法ではないかと思われる。そのような対処方法をとってでも、人間関係

の維持と自己の主張の二つの目的を達成できる方略をとろうとするタイ人の巧妙さ、したたかさがうかがえるからである。

それでは、自分の意思を伝達しなかった場合はどのようになるだろうか。人間関係の維持という最優先の目標は達成できるが、本人はうっぷんがたまり、第三者に愚痴を言ったりすることになる。本人が怒っていることが相手に伝わらないことから、相手の態度を変化させることも状況を改善することも期待できない。そのため、この対処方法をとる場合が多いものの、最も良いとは考えられていないようである。次は30代女性の発話例である。

> ใช่ เงียบไว้ดีที่สุด ถ้า ณ ปัจจุบัน อายุ 33 ปี 11 ปีกับที่ทำงาน ความเงียบคือสิ่งที่ดีที่สุด มันอาจจะอัด อั้น ไม่พอใจ ขนาดลิ้งใน Facebook ที่มันมีเพื่อนทำงาน เพื่อนร่วมงาน เพื่อนที่เรียนเงี้ยะ ระบายได้ แต่จะไม่มีการเอ่ยถึงบุคคลที่สาม แต่จะไม่ระบายเต็มที่อ่ะ
>
> （訳）そうです。黙っているのが一番いい。今33歳で、今の職場には11年いますけど、沈黙が一番いいことです。気詰まりだし不満に感じるかもしれませんが。フェイスブックでは同僚や大学の友達と話ができて気晴らしができます。でも第三者については言及しません。でも完全に気が晴れるわけではないですけど。

「表出しない」という対処方法を選択した場合、怒りを感じさせた相手に対する不満や怒りを伝達できないことから、本人が第三者に愚痴を言って、うっぷんをはらす場面が多くみられた。一方で、自分のいないところで、第三者が自分の陰口や悪口を言うことに対する不満の声も聞かれた。直接相手に怒りを表出せず、陰口をいうことにより、怒りが長期的にくすぶり、お互いにすっきりしないまま、相手の顔色を窺いながら、今後の人間関係を表面的にかろうじて維持しているようである。「無表出」は、人間関係の維持という目的は達成することができても、お互いの理解や主張の機会はなく、精神的にも悪影響があることから、多用される対処方法ではありながら、望ましい対処方法であるとは考えられていない。

上記の考察結果は図1の考察項目「自己の意思の伝達」及び「怒りの社会的機能」に図示した。

(5) 怒りの社会的機能

タイ人が怒りを表出するのは、自分が不満であることを相手に知らせたい、自己の主張をしたいからだけでなく、相手に行動の変化を期待しているからである。自分たちの文化や社会のルールを守ってほしい、相手がその行動をやめることで、罰則を受けないようにしたい、自分が間違っていることを自覚させたいなど、相手の言動に対する不満を伝えることで、その言動をやめることを期待している。変化させなければならない行動とは、自分が不満であると感じる行動だけでなく、特にタイの社会で正しいと容認されている社会文化的規範や職場などの組織内でのルールがある。また面接協力者の中には、子供や学生や部下など、自分より目下で、指導的立場にある場合は、大きな声を出さないということをきかない、大人は子供を教育しなければならないと考え、実際に感じている以上に怒りを強く表現し、相手に自分の望むような行動を強制すると話す者もいた。

しかし、相手が目下でない場合は、自己の権利の主張や相手の行動の変化という目的が最も効果

的に果たされるのは、怒りを抑制しつつ、自分の意思を理論的に伝えることができた場合に限定されると考えられる。なぜなら、強い感情表出をした場合には、自己の感情や不満を主張することはできても、その後人間関係が悪化する恐れがある。逆に「無表出」の場合には、人間関係を維持することはできても、相手は自分が怒っていることに気付かず、相手の行動の変化が期待できない。従って、「冷静に話す」、「注意する」といった方法が最も多用されるのは、自己の権利の主張と人間関係の維持の二つの目的を同時に達成できる可能性が最も高いからだと考えられる。このような考え方に基づき「冷静に話す」という対処方法をとった40代女性の発話データを次に示す。

ถาม ทำไมเราเลือกใช้วิธีการแบบนี้กับคนในที่ทำงาน คืออธิบาย

ตอบ มีความรู้สึกว่ามันเป็นอะไรที่แก้ไขได้ง่ายกว่า มันเป็นวิธีการที่ง่ายที่จะบอกว่าชอบอะไร ไม่ชอบอะไร และหาจุดร่วมกันที่จะแก้ปัญหานั้นเพื่อหาจุดร่วมกัน

（訳）

質問：なぜ職場の人に対して、（怒りを感じた時に）説明するという方法をとるのですか?

回答：その方が問題を解決しやすいと感じるからです。何が好きか、何が好きじゃないかを言って、妥協点を探すのは、簡単な方法です。

ก็พอใจมั๊งคะ เพราะเราก็บอกแล้ว มันไม่น่าจะเกิดเหตุการณ์แบบนี้อีกครั้งในอนาคต เพราะ เราก็แสดงให้เห็นแล้วว่าตัวนี้ที่จริงๆ ในความเห็นของเรามันควรจะเป็นยังไง แล้วเขาก็ยอมรับว่าเขาต้องระมัดระวังในการทำแบบนี้ครั้งต่อไป

（訳）まあ満足じゃないでしょうか。自分もいうべきことをいったし、これからはこんなことは二度と起こらないと思います。自分は本当はどうすべきだと思っているかをきちんと言いましたから、次回は注意しなければならないということを相手は受け入れたと思います。

もっとも、自己の主張をし、相手の行動の変化を期待することはあっても、相手に行動の変化を強制しているわけではない。食事制限をしている父親が医師に禁止されている食品を食べようとするのをやめさせようとした場面では、「いずれ人間は死ぬ運命ですから、食べるか食べないかを決めるのは父です。」という。目上の人に意見を言っても考えを変えない、自分が言った通りに相手がするかどうかは相手の問題、相手のやり方を変えることはできない、お互いを尊重しなければならないなど、自分の主張をしつつも相手の意思を尊重しようとする気持ちが非常に明白である。特に相手が目上の場合や親密度の低い人の場合は、相手の行動の変化への期待のレベルが低下するようである。40代女性は、自分の主張を強制できないことについて次のように話している。

ไม่ชอบทะเลาะ มันไร้สาระ คือโอเคถ้าทำไม่ได้ แล้วอีกอย่างเราต้องเคารพในความเป็นเค้า ด้วย เค้าเป็นคนนิสัยแบบนี้ เราไปเปลี่ยนเค้าไม่ได้ คือเราแค่บอกเงื่อนไขของเรา แต่ทำหรือไม่ทำขึ้นอยู่ที่เค้า พอเราจะไปบอกเค้าว่าแกต้องทำอย่างงี้นะ เราก็จะไปบังคับเค้ามากไป คือมันเป็นสิทธิ์ของเค้า

（訳）喧嘩するのが嫌なんです。そんなの意味がないし。できないならできないでいい。それに相手のことも尊重しなければなりません。その人がそういう性格なら、相手を変え

ることはできません。つまり私はただ自分の条件を示すだけです。やるかやらないかは相手次第です。もしあなたはこうしなくちゃだめだと言ったら、相手に強制しすぎです。それは相手の権利なんです。

このように、相手に自分の主張をし過ぎてはいけないと考えるタイ人の態度は、Suntaree［1990］の「エゴ志向」を反映していると考える。彼女が述べるように、タイ人のエゴは独立、誇り、尊厳に対する深い意識を意味する。タイ人は自分のエゴを守るため、相手が間違っていると感じた場合には、感情を抑制しつつも、敢えて自己の主張をすることを選択しようとする傾向が強いのかもしれない。それでも、お互いのエゴを傷つけないために遠慮する気持ち（*クレンチャイ*）を持ち、相手の権利に必要以上に踏み込まないようにしているのではないか。タイ人は自己主張はしても、自分の主張が聞き入れられなくてもかまわないと考える。相互の寛容や割り切りによって、お互いのエゴを守り合い、注意深く相手との良好で平穏な人間関係を維持しようとしているのだろう。

上記の考察結果を図式化して図１の「怒りの社会的機能」に示す。

(6) タイ人の怒り対処方略のモデル化

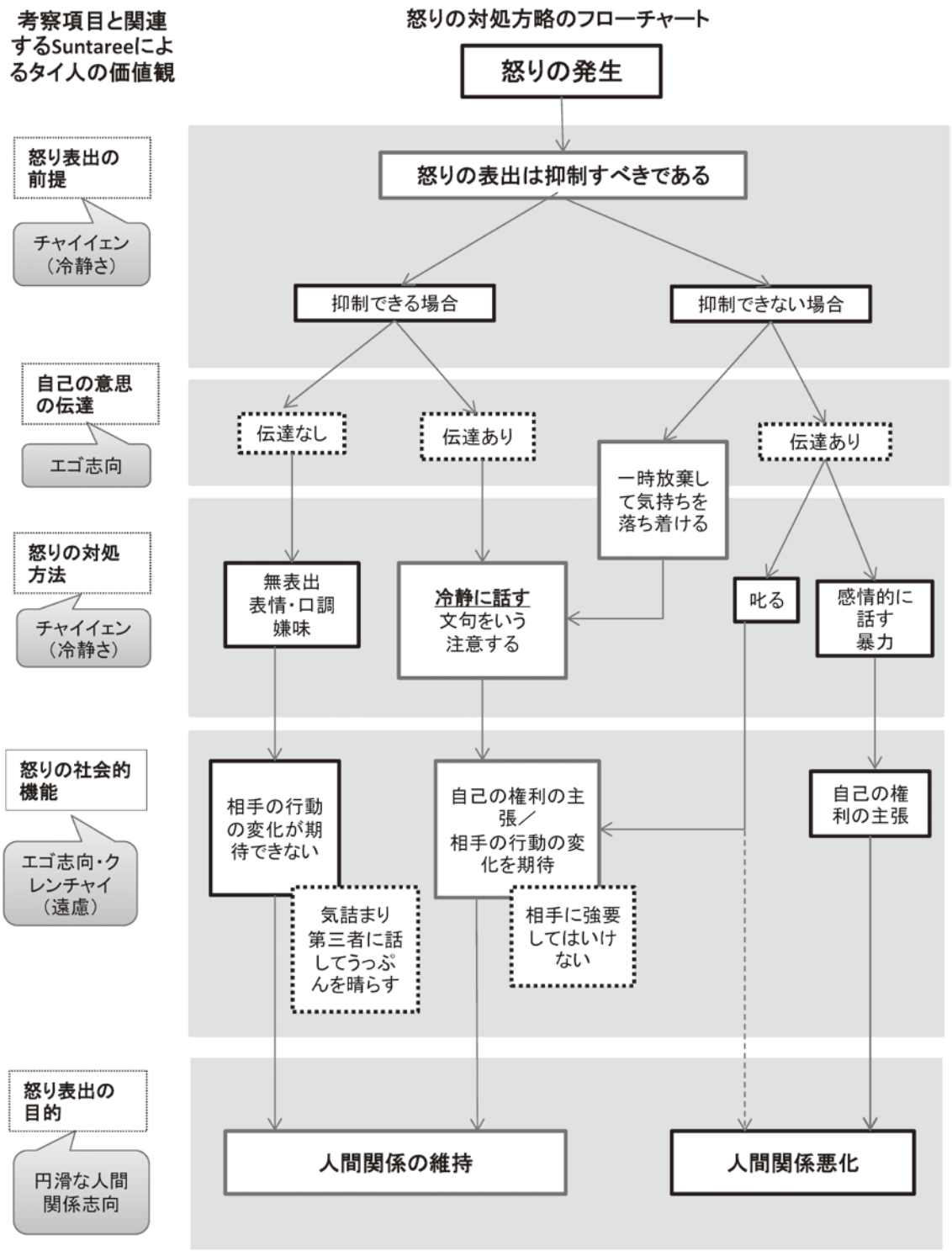
以上、面接調査の結果、タイ人の怒りの対処方法が状況や人間関係によって様々に変化することが見出された。それぞれの怒りの対処方法をとった場合の社会的機能と帰結の展開を、上述の結果と考察に基づきながら整理し、タイ人の怒り対処方略モデルを図にしてみたので説明する（図参照）。

図に示すように、モデル化にあたっては、怒り感情が発生した状況において、タイ人の怒り対処方略における前提である「表出を抑制すべきである」を出発点とした。次に、怒りを感じた場合に抑制できる場合と抑制できない場合とに分けた。また、怒りを抑制できた場合の対処方法は、自分の意思を相手に伝達するかしないかによって分類した。怒りを抑制するが、自分の意思を伝達しない対処方法は、「無表出」、「表情・口調」、「嫌味」である。怒りを抑制するが、自分の意思の伝達をする対処方法は、「冷静に話す」、「文句を言う」、「注意する」である。

怒りを抑制できない場合は、「叱る」、「感情的に話す」、「暴力」といった対処方法がとられる。「叱る」は相手の行動を指導的に変えたいという意思がある場合の対処方法であり、単に怒りを抑制できずに表出する、「感情的に話す」や「暴力」とは区別される。また、感情の抑制ができなかった場合に、「一旦放棄して気持ちを落ち着け、気持ちが落ち着いてから話し合う」という対処方法もとられる。これは、その後の展開として感情が抑制できたため「冷静に話し合う」に移行することがある。

怒り感情の社会的機能については、それぞれの対処方法によって達成される社会的機能を、自分の権利が主張できるかどうか、相手の行動の変化を期待できるかに着目しながら分類した。さらに、それぞれの対処方法は、結果として、相手との「人間関係の維持」という目的にとって役立ったかどうかという帰結を示した。

また、円滑な人間関係志向（人間関係の維持、*チャイイェン*（冷静さ））、エゴ志向（自己の権利の主張、相手のエゴの尊重、*クレンチャイ*（遠



出典）分析結果と考察により筆者作成。

図　タイ人の怒り対処方略モデル

慮））といったSuntaree［1990］が提唱したタイ人の価値観を、タイ人の怒り方略モデルにおける、怒り表出の前提と目的、自己の意思の伝達、怒りの対処方法、怒りの社会的機能に結びつけた形で示している。

5．まとめ

本研究では、バンコクの高等教育機関に在籍する社会人学生及び職員への怒りの経験に関する面接調査をもとに、タイ人の怒りの対処方法、対処方法選択の理由、対処方法に対する評価などを分析し、分析結果をSuntaree［1990］のタイ人の価値観を踏まえて考察し、タイ人の怒りに対する対処方略がタイ人の価値観を反映したものであることを再認識し、タイ人の怒りへの対処方略モデルへと発展させた。

研究の結果、タイ人が怒りを感じた相手との人間関係を維持するために怒りを抑制すべきだと考えていること、また、怒りを感じたことを相手に伝え相手の行動を変化させるために自己を主張しようと努力するが、自己の主張を必ずしも強制しているわけではないということが示唆された。

こうした対処方略は、Suntaree［1990］が明らかにしたタイ人の価値観が反映されていると考える。人間関係の維持のために怒りの表出を抑制すべきだとする態度には、彼女のいう「円滑な人間関係志向」が反映されており、その手段として彼女のいう*チャイイェン*（冷静さ）をタイ人が重視していることが、面接結果を基にタイ人の怒り対処方略モデルを作り上げてみる作業により再確認された。

また、タイ人が怒りを感じた場合に、自己主張をしようとする一方で、相手の権利も尊重し、相手の行動変化をかならずしも強制できない、相手の権利に踏み込みすぎてはいけないと考えている点は、「エゴ志向」を反映しているものと考える。相互のエゴを尊重するための手段として、Suntaree［1990］のいう*クレンチャイ*（遠慮）が重視され、エゴの衝突を回避するためのメカニズムを作り出しているのだろう。タイ人の怒りの表出方法は、*チャイイェン*、*クレンチャイ*といったタイの社会・文化に根差した価値観に少なからず規定されていることが本研究の結果からもうかがえる。

すなわち、「冷静に話す」という対処方法が多用されていたのは、この対処方法が、円滑な人間関係志向とエゴ志向というタイ人の2つの重要な価値観を反映する対処方法であるからではないだろうか。このことは今後タイ人の怒りの表示規則を検討する上で、特に重視するべきであると考える。

本研究から、タイ人が家族や職場などの所属集団である内集団と見知らぬ人などの外集団のメンバーに対し、異なる怒りの対処方法をとる傾向があるという知見が示唆された。これは、集団主義文化の行動の特徴とも考えられるが、家族や職場といった内集団の属性によっても、怒りの対処方法に差異がある可能性があるという点については注意深く検討する必要があると考える。それはタイ人にとって家族以外の内集団における人間関係に不確実性が伴うため、良好な人間関係を維持するためには、より多くの努力を払う必要があると考えているからではないかと推察される。ホームズ・スチャーダー［2000:87-88］は、タイの社会は、家族の世界、気配りの世界（家族以外の内集

団)、自分本位の世界（外集団）の３つに構成され、特に気配りの世界で、様々なタイ的価値観が重視されると述べている。これは、本研究によって得られた推論と一致する。今後、タイ人の家族と家族以外の所属集団における怒りの対処方法の違いを検討することが必要なのではないかと考える。

なお本研究の対象者は、バンコクの大学関係者であったため、本研究でいうタイ人が、階層社会であり、職業、出身地、年齢、学歴などによって多様性のあるタイ人全体を反映する結果は得られていない可能性がある。今後さらに多様な社会階層のタイ人を対象として研究することによりタイ人の怒り対処方略の一般化を行う必要がある。

本研究によって得られた結果はまだ仮説の段階であり、量的研究などの実証的な研究を行って仮説を検証するとともに、日本人と比較することによりタイ人の感情世界の文化的特徴をさらに検討していきたい。

注

1）Oxford Dictionary of English [2005] によれば、ego (noun) とは、1. A person's sense of self-esteem or self-importance 2. <Psychoanalysis> the part of the mind that mediates between the conscious and the unconscious and is responsible for reality testing and a sense of personal identity 3. <Philosophy> (in metaphysics) a conscious thinking subject とあるが、スンタリーの研究のおけるエゴは、「A person's sense of self-esteem（自尊心)、あるいは self-importance（自己過大視)」を意味すると考える。

2）「冷静に話す」とは、理論的に話し合う、感情を抑えて話し合うなどの怒りの対処方法を総称して筆者が作成したカテゴリー名であり、Suntaree［1990］のいうチャイイェン（冷静さ）とは関連していない。

3）Suntaree［1990］によれば、タイ人の９つの価値群の中で、エゴ志向に次いで重視されるのが報恩的関係志向（Grateful Relationship Orientation）とされている。報恩的関係志向とは、親や教師など深く意義のある支援を与える者と受けた支援に報いようとする者との報恩的関係に基づく誠実で温かな人間関係に対する価値観を指す。従って、恩義のある目上の人に対して、感情を抑制し従順な態度をとることが予想される。しかし、この価値観は特に地方の住民によって最も重視されているものの、バンコクの住民にとっては４番目に重視されていることが明らかになっている［Suntaree 1990］。本研究で、目上の人に対しても「冷静に話す」という対処方法が最も多くとられているという結果になったのは、対象者がバンコクの住民であり、彼らは報恩的関係志向よりも実利志向性が高いためなのかもしれない。

引用文献

Averil, James R. 1980 "A Constructivist View of Emotion" in R. Plutchik & H. Kellerman (ed.) *Emotion: Theory, Research and Experience, vol. 1*, New York: Academic Press, pp.305-339.

——————— 1982 *Anger and Aggression: An Essay on Emotion*, New York: Springer-Verlag.

Baxter, Leslie A. and Babbie, Earl 2004 *The Basics of Communication Reseach*, Belmont, CA: Wadsworth.

シャーマズ、キャシー著（抱井尚子、末田清子監訳）2008『グラウンデッド・セオリーの構築』ナカニシヤ出版。

コーネリアス、ランドルフ R.著（齊藤勇監訳）1999『感情の科学』誠信書房。

Ekman, Paul and Friesen, Wallace V. 2003 *Unmasking the Face*, Cambridge, MA: Malor Books.

Embree, John F. 1950 "ThailandA Loosely Structured Social System", *American Anthropologist*, 52(2): 181-193.

Hofstede, Geert 1984 *Culture's Consequences: International Differences in Work-Related Values*, Newbury Park, CA: Sage Publications.
ホームズ、ヘンリー・スチャーダー タントンタウィー著（末廣昭訳）2000『タイ人と働く』めこん。
木野和代 2000「日本人の怒りの表出方法とその対人的影響」『心理学研究』70 (6)。
――― 2004「対人場面における怒りの表出方法の適切性・効果性認知とその実行との関連」『感情心理学研究』10 (2)。
大渕憲一・小倉左知男 1984「怒りの経験（1）：Averilの質問紙による成人と大学生の調査概況」『日本犯罪心理学研究』22 (1)。
Oxford Dictionary of English (2nd ed.) 2005 Oxford, UK: Oxford University Press.
Phillips, Herbert P. 1965 *Thai Peasant Personality: The Patterning of Interpersonal Behavior in the Village of Bang Chan*, Berkeley, CA:University of California Press.
Porter, Richard E. and Samovar, Larry A. 1998 'Cultural Influences on Emotional Expression: Implications for Intercultural Communication and Emotion' in Andersen, P. A. and Guerrero, L.K. (ed.) *Handbook of Communication and Emotion: Research, Theory Applications and Contexts*, San Diego, CA: Academic Press, pp.451–472.
Potegal, Michael and Stemmler, Gerhard 2010 'Cross-Disciplinary Views of Anger: Consensus and Controversy' in Potegal, Michael, Stemmler, Gerhard and Spielberger, Charles (ed.), *International Handbook of Anger*, New York: Springer Science + Business Media, pp.3–8.
Rokeach, Milton 1973 *The Nature of Human Values*, New York: The Free Press.
冴木クレイグヒル滋子 2008『実践グラウンデッド・セオリー・アプローチ』新曜社。
Sharp, Lauriston, Hauck, Hazel M., Janlekha, Kamol and Textor, Robert B. 1953 *Siamese Rice Village: A Preliminary Study of Bang Chan, 1948–1949*, Bangkok: Cornell Research Center.
Suntaree Komin 1990 *The Psychology of the Thai People: Values and Behavioral Patterns*, Bangkok: National Institute of Development Administration (NIDA).
渡辺文夫・山内宏太朗 1998「第 8 章　調査的面接法」『人間科学研究法ハンドブック』（高橋順一・渡辺文夫・大渕憲一編著）ナカニシヤ出版。